奈良時代の密教造像における明王の出現
――奈良・大安寺嘶堂 伝馬頭観音立像の意義――

津田 徹英

はじめに

小稿は奈良時代（八世紀）における密教の浸透を見据えつつ、標題に掲げる作例の意義について再検討を試みるものである。密教の日本への本格的導入は、大同元年（八〇六）に唐から帰国した空海によってなされた。ただし、それを遡って奈良時代において既に密教が流入していたことも周知の事実である。それゆえ両者を区別すべく、前者を「純粋密教（純密）」と呼び、これを基準にして後者を「雑部密教（雑密）」もしくは「古密教」[1]と称することもある。その呼称のうちに、前者は「ほとけ」の世界が金胎両部からなり、いずれの場合も最外周縁に至るまで大日如来を核にして体系的に組織化されていると認識がなされるのに対して、後者は諸尊ごとに世界観を有してそのなかで完結しており、いまだそれらを体系的あるいは包括・組織的に統べる上位の尊格がなく、その信仰も個々の尊格への崇敬が専らであり、それは十一面観音、千手観音、不空羂索観音といった変化観音を中心にした信仰であったようである。標題に掲げた尊像もその例外ではなく、奈良時代の「雑密」あるいは「古密教」の変化観音像の一つとして認識され、今日まで研究が進んできたといえるであろう[2]。

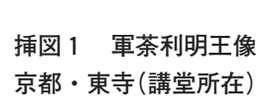
一、密教における明王像とその位相

ところで、標題の作例についての再検討を行ううえで、あらかじめ及んでおきたいのは、密教とそれ以前から存在した仏教（以下、「伝統仏教」[3]）の尊格における決定的な違いは何かということにある。そのことはそれぞれの尊格構成を比較してみるとわかりやすい。

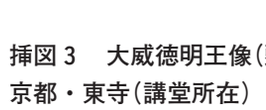
「伝統仏教」の尊格構成は、仏（如来）、菩薩、天からなる。一方、密教では、これらに「明王」という尊種・尊格が加わる。この点に大きな相違と特徴があるといってよい。その「明王」の姿かたちが視覚的にどのようなものであったかということを確認しておく

と、それは「伝統仏教」以来の菩薩の着装を基本にしていることに気が付くであろう。試みに平安時代の密教彫刻を代表する京都・東寺（講堂所在）の五大明王像で、この視覚表現のありようを確認しておくと以下の通りである。

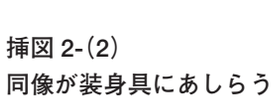
すなわち、軍荼利明王像（**挿図1**）を具体的な例として取りあげてみるとき、その着装において上半身には左肩から右脇腹に及んで条帛と呼ばれる細い布を懸けており、下半身には裙を纏い、さらに、正面において蝶結びとする腰布を着用し、装身具を着けている。それらの点は「伝統仏教」の菩薩の着装を基本にするものである。その一方で「伝統仏教」の菩薩との着装の違いを際立たせてい



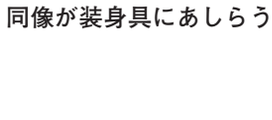
挿図 1　軍荼利明王像
京都・東寺（講堂所在）



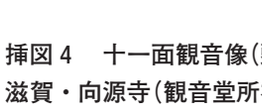
挿図 3　大威徳明王像（頭部）
京都・東寺（講堂所在）



挿図 2-（1）
軍荼利明王像が腰に纏う「獣皮」

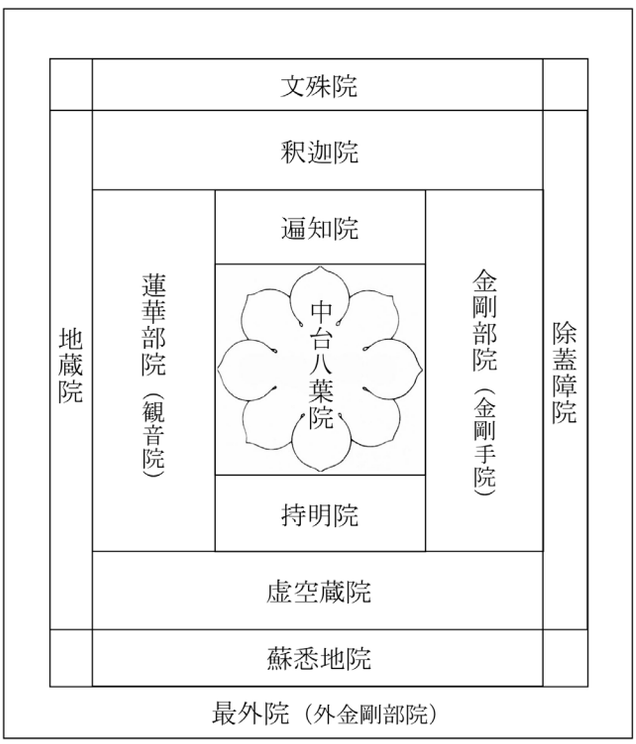


挿図 2-（2）
同像が装身具にあしらう「蛇」

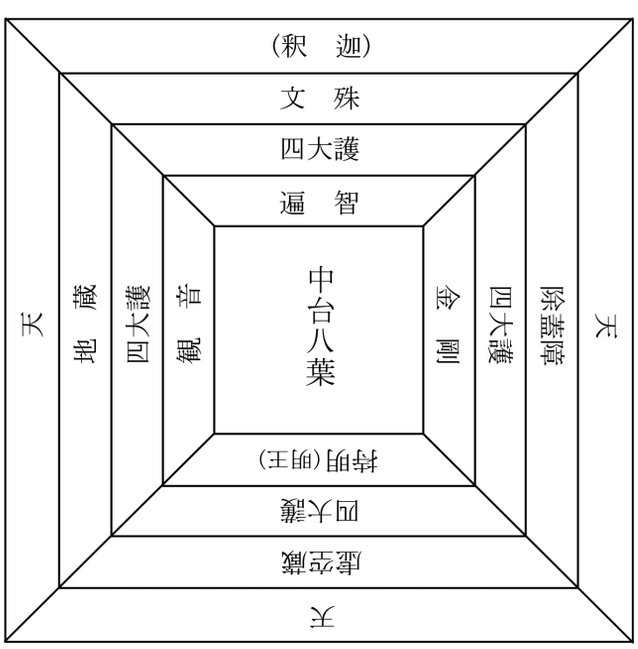


挿図 4　十一面観音像（頭部）
滋賀・向源寺（観音堂所在）

るのは、菩薩における着装では通例となる背後から両肩を覆い、両腋前に懸かる「天衣」を着けておらず、逆に腰には腰布と裙の中間層に「獣皮」を纏い、裙は両膝頭の上まで露出させ、装身具（腕釧・足釧）に蛇をあしらっている点にある（**挿図2**）。また、身体表現（容姿）において、かの軍荼利明王像は髪を逆立てた「炎髪」となり、その面相は眉根を寄せて額の中央には一眼が加わり、いずれの眼も大きく見開くとともに上歯牙で下唇を噛みしめ、それらをもって「瞋怒」の表情を演出している。加えて、腕の数は二本に留まらない「多臂」となり、身色も黒または紺色となって、拝する者を威嚇するおどろおどろしい形相が前面に押し出されている。さらに大威徳明王像（**挿図3**）では開口して歯牙をあらわし、「多臂」となるだけでなく「多足」となっており、脇面や頭上面をともなって「多面」となっている。このほか、金剛夜叉明王像では真面が五眼となっており、「多目（多眼）」は三眼に留まるものではないといえよう。そしてそれらによって一層、人間離れした姿かたちが強調されることになる。もとより、これらの特徴のうち「多面」、「多目」、「多臂」は、密教の菩薩像、とくに「変化観音」と呼ばれる十一面観音像（**挿図4**）や不空羂索観音像、千手観音像にも認める



挿図5　現図胎蔵曼荼羅 概念図（津田作成）



挿図6　胎蔵図像の配置復元 概念図（津田作成）

ことができる。

とすれば、密教尊像としての明王と菩薩を分かつ視覚的（見た目の）特徴ということになると、明王像には畏怖・威嚇をともなう瞋怒の表情と、時として装身具に蛇をモチーフに組み込んだものを着けることが密教における菩薩と明王を視覚的に峻別する判別基準となり得るように考えるのである。ただし注意を要するのは、両者は視覚的に様相を違えるものの、その格付けが同格であることを忘れてはならない。そのことも意外に見過ごされがちである。というのも仏像の種類を概説的に取り扱った啓蒙書の類では仏尊の種類を説明する際、ピラミッド構造の図示を用いてなされることもしばしばであるが、そこでは明王が菩薩より格下であるかのごとく表示される傾向にある。しかしながら、本来、明王と菩薩（ことに観音）が同格の存在であることは、密教尊の組織構成と秩序を可視化した現図胎蔵曼荼羅の構造（**挿図5**）をみれば明白であろう。その中にあって観音部（「蓮華部院」）と明王部（「持明院」）が同格に位置づけられていることは、平面図としての現図胎蔵曼荼羅を、横からの階層構造として捉え直してみるときはっきりとわかる。そこでは大日如来を頂点とするピラミッド型の階層構造（ヒエラルヒー 独語：Hierarchie）を形成しつつ、観音部（「蓮華部院」）と明王部（「持明院」）は同じステージ（階層）上にあり、同一の格付けにあることが示されている。もとより現図胎蔵曼荼羅に先行する『胎蔵図像』あるいは『胎蔵旧図像』の復元配置（**挿図6**）においても「観音」部と「明王」部（「持明」部）は同一階層上に位置図けられている。[4] そのことも等閑視すべきではない。

二、奈良時代における金胎両部の根本経典の受容

さて、ここで明王像のわが国における顕現ということを考えてみるとき、東寺講堂五大明王像をもって現存最古の作例とするところから、[5]「瞋怒」の形相を有し、時に「多面」「多目」「多臂」をもってあらわされる明王像の出現は、密教を中国よりたらした空海の帰国以降のことであると理解されてきた感がある。[6] その背後には「純密」と「雑密」の間に明確な一線を画そうとする意識が働いていたものとも思われる。しかしながら、この明王の顕現ということを考えるうえで、「純密」における金胎両部の曼荼羅の教理基盤をなしていた善無畏・一行共訳の『大毘盧遮那成仏神変加持経（以下、大日経）』、あるいは『金剛頂経』の初会に相当する金剛智訳の『金剛頂瑜伽中略出念誦経（以下、略出念誦経）』のいずれもが、奈良時代には日本にもたらされて受容されつつあった事実は今一度、確認しておく必要がある。

ちなみに、奈良時代の密教のありようについての研究は、南都仏教の展開を見据えて歴史学あるいは宗教文化史の研究分野が牽引してきた感がある。ことに堀池春峰氏の研究を踏まえると、奈良時代の密教は、十一面観音、千手観音、不空羂索観音などの密教系の変化観音を中心とした信仰であり、それらの尊前で陀羅尼を唱えることが主な信仰形態であったと理解されてきたようである。[7]

ただし、その一方で考慮されなくてはならないのは、石田茂作氏が奈良時代写経の分析を通じて明らかにされたように[8]、大蔵経密教部の経典五九五部のうち、約四分の一に相当する一三九部が既に奈良時代には中国からもたらされていた事実にある。ことに重要と思われるのは、そのなかに、「純密」において重視された金剛智、善無畏、不空、一行などの手になる訳経が含まれていたことにある。

表１「正倉院文書」にあらわれた『大日経』と『略出念誦経』の書写(一覧)

対象経典	事業日（出納もしくは写後検収）	巻数	枚数	巻	頁
『大日経』	天平 8年（736）9月29日	3巻	一	7	75
	天平 8年（736）9月29日	3巻	一	7	80
	天平18年（746）3月10日	全7巻	138紙	9	77
	天平18年（746）3月10日	巻1,6	36紙	9	85
	天平18年（746）3月14日	巻6	15紙	24	348
	天平勝宝3年（751）9月20日	全7巻	148紙	12	87
	天平勝宝3年（751）9月20日	全7巻	152紙	12	125
	天平勝宝5年（753）5月 7日	全7巻	一	12	445
	天平神護3年（767）2月22日	全7巻	一	17	48
	宝亀2年（771）閏3月 1日	全7巻	155紙	18	298
	宝亀2年（771）閏3月 1日	全7巻	155紙	18	320
	宝亀2年（771）閏3月27日	全7巻	155紙	18	380
	宝亀2年（771）閏3月29日	全7巻	155紙	18	406
	宝亀2年（771） 8月15日	6巻	155紙	19	56
	宝亀2年（771） 8月15日	全7巻	155紙	19	58
	宝亀3年（772） 1月12日	全7巻	一	19	142
	宝亀3年（772） 3月15日	全7巻	156紙	19	384
	宝亀3年（772） 3月25日	全7巻	161紙か	19	425
	宝亀3年（772） 3月25日	巻1～4	88紙	19	435
	宝亀3年（772） 3月29日	全14巻	311枚	19	531
	宝亀3年（772） 3月29日	6巻	152枚	19	533
	宝亀3年（772） 4月20日	全7巻	156枚	20	2
	宝亀3年（772） 7月28日	巻6,7	48紙	20	218
	宝亀3年（772）月日欠	全7巻	156紙	21	38
	宝亀3年（772）類収	全7巻	155紙	21	101
	宝亀4年（773） 8月25日	巻1,3,5	66紙	22	131
	宝亀4年（773） 8月25日	巻2,4,6,7	94 紙	22	170
	宝亀4年（773）10月16日	全7巻	160紙	22	274
	宝亀5年（774） 8月 2日	全7巻	145紙	22	520
	宝亀5年（774）10月17日	全7巻	一	23	113
	宝亀5年（774）10月17日類収	全7巻	一	23	135
	宝亀6年（775） 2月 2日	全7巻	145紙	23	396
	宝亀6年（775） 5月18日	全7巻	145紙	23	492
『略出念誦経』	天平 9年（737）4月27日	全4巻	100枚	24	53
	天平18年（746)12月10日	巻1～3	74紙	9	311
	天平19年（747）9月27日	巻1(or 2)	28枚	9	456
	天平20年（748）8月 4日	全4巻	一	10	326
	天平20年（748）月日欠	全4巻	一	3	149
	天平勝宝3年（751）9月20日類収	全4巻	96紙	12	88
	天平勝宝3年（751）9月20日類収	全4巻	104紙	12	126
	天平勝宝5年（753）5月 7日類収	全4巻	一	12	488
	天平勝宝8年（756）7月 2日	全4巻	一	13	175
	宝亀2年（771）1月24日	巻1,2	38紙	18	167
	宝亀2年（771）3月20日	全4巻	106紙	18	240
	宝亀3年（772）1月12日	全4巻	一	19	143
	宝亀3年（772）3月15日	全4巻	105紙か	19	371
	宝亀3年（772）7月24日	全4巻	105紙	20	175
	宝亀3年（772）7月28日	巻1	27紙	20	211
	宝亀3年（772）月日欠	全4巻	105紙	21	38
	宝亀3年（772）類収	全4巻	106紙か	21	101
	宝亀4年（773）8月25日	全4巻	94紙	22	152
	宝亀4年（773）8月25日	巻1	11紙	22	155
	宝亀5年（774）10月17日類収	全4巻	一	23	146
	宝亀6年（775）2月 1日	巻1,2,3	75紙	23	322
	宝亀6年（775）2月 2日	巻1	25紙	23	397
	宝亀6年（775）5月18日	巻4	22紙	23	507

※一覧の作成には『大日本古文書 編年文書』を使用した。向かって右端の「巻」、「頁」は同書の巻次と収載頁を示す。

石田茂作氏の指摘にしたがうと、それらの経典の特徴は、そこに説かれる諸尊が組織的で、かつ曼荼羅を有する点にあるといい、彼らの手になる訳経を「新密教」の経典に分類するとともに、彼ら以前の訳経にはそのことへの意識が希薄であり、これを「古密教」の経典と位置付けて一線を画している。傾聴すべき指摘であろう[9]。

ここで試みに『大日経』と『略出念誦経』の日本への到来とその後の受容に目を向けてみると、それらは霊亀二年（七一六）に入唐し、十八年の在唐を経て、天平六年（七三四）十月に帰国した玄昉が日本に持ち帰った一切経「五千餘巻」[10]のなかに含まれていたとみなければならない。この「五千餘巻」は決して誇張された数字ではなく、その収集は開元十八年（七三〇）に完成した二十巻に及ぶ知昇編『開元釈教録』にもとづいてなされたものであった[11]。ただし、在唐中に玄昉が入手した『開元釈教録』は第十二巻を欠いていたことも明らかになっている[12]。ちなみに、その第十一巻から第十三巻までが一切経の具体的内容を知るためには必要不可欠とされていたが、玄昉が在唐中に入手できたそれには肝心の第十二巻を欠本としており、そこで玄昉は第十九巻・第二十巻に収められるところの西崇福寺の「蔵経目録」、それは『開元釈教録』の編者・知昇そのひとが止住した寺院の蔵経目録であるが、それにしたがっての収集であったことが指摘されている[13]。

その第十九巻には「大毘盧遮那成佛神變加持經七卷（亦云大毘盧遮那成佛經）一百三十五紙」、「金剛頂瑜伽中略出念誦法（亦云）經八十一紙」の記載が確認できる[14]。前者は善無畏（六三七～七三五）とその指導を受けた一行（六八三～七二七）の共訳で開元十三年（七二五）に訳出された『大日経』のことであり、後者は金剛智（六七一～七四一）により開元十一年（七二三）に訳出された『略出念誦経』そのものを指す。いずれも玄昉の在唐中の訳出であり、仏典の収集がこの目録にもとづいていたところから、玄昉のもたらした一切経「五千餘巻」のうちに両経は含まれていたとみてよいであろう。

ここで「正倉院文書」に確認できる両経の書写に留意してみるとき（**表1**）、それぞれの初出は、『大日経』が天平八年（七三六）で

挿図7　大毘盧遮那成仏経 巻第一（巻末部分）　奈良・西大寺

あり、『略出念誦経』がその翌年であった。そのことも天平六年の玄昉帰朝に際して両経がもたらされていたと推定したこととも矛盾はない[15]。これ以降の奈良時代における両経の受容のありようは、「正倉院文書」に記録された写経のための両経の出納と、書写後の確認と検収記録のうちに窺うことができる。また、書写をみた具体的遺例（現存例）には天平神護二年（七六六）の奥書識語がともなう西大寺所蔵の『大日経』全七巻（吉備由利願経）に求めることができる[16]（**挿図7**）。加えて見過ごせないのは、『大日経』、『略出念誦経』ともに、その名が「正倉院文書」にあらわれる頻度が宝亀二年（七七一）以降、一挙に高くなる点にある[17]（**前掲表1参照**）。このことに関わって留意しておきたいのは宝亀年間（七七〇～七八一）に入唐を果たした徳清[18]の目的の一つが「未度（渡）来書」を持ち帰ることにあり、それが『大毘盧遮那経義記』であったと指摘されることにある[19]。『大日経』の内容は非常に難解であり、これを読み解くためには、その注釈書に相当するもの（疏・義釈）が必要不可欠であり[20]、玄昉もそのことは承知していたようである。すなわち、天平六年の帰国に際し、あわせて善無畏釈・一行記の『大毘盧遮那経義記』十巻を将来していたことが知られる。にもかかわらず徳清は改めて『大毘盧遮那経義記』七巻（各巻上・下からなる全十四巻）を持ち帰っていたことになる[21]。そして、その理由は玄昉将来のそれに不備があったため[22]、これを解消することを目的としての将来であったとされている[23]。畢竟そのことは、この頃、『大日経』の教理理解を行う上で必要に迫られての再将来であったとみなされるであろう。徳清による宝亀年間の入唐の時期において「正倉院文書」から窺うことのできる『大日経』書写の頻度が一挙に上昇していたこともやはり偶然ではなかったといえよう。そのことを思えば、当時にあって『大日経』が単なる写経の対象に過ぎず、教理の理解までに及んでいなかったという指摘[24]には逡巡せざるを得ない。もとより『大日経』にとどまらず「純密」の根本経典の日本での受容が宝亀の頃にはかなり進んでいたであろうことは、「正倉院文書」にみる『略出念誦経』の書写の頻度にも窺うことができる（上述）。そして、それらのことは「純密」を本格的に受け入れる土壌がその頃には整いつつあったことを示唆するものであり、とすれば両経に説かれる明王の存在は当然知られていたものと思われる。そのことを踏まえるとき、この時期の造像において明王像の顕現、もしくは、その胎動を思わせるような事象が本当になかったかどうかは改めて検討してみる必要がある。

三、統一新羅時代の八大明王像

―同時代の東アジアにおける明王像の遺例―

これまで奈良時代の明王造像については、とりたてて議論がなされることはなかった。奈良時代にあって『大日経』、『略出念誦経』にとどまることなく善無畏、金剛智といった石田茂作氏がいうところの「新密教」の訳経の受容があったことを思うとき[25]、そのなかに説かれる明王に触れる機会はあり、明王についての認識はあったも

のとも思われるが、実際の造像にまでは至らなかったのであろうか。もとより造像があり得たことの一端は、宝亀十一年（七八〇）勘録の『西大寺資財流記帳』にあらわれた明王に該当する尊像記載に認めることができる（後述）。しかしながら、それをもってしても当時の造像の実態に肉薄することには困難がともなうのも事実であろう。それゆえここでは、まずモノそのものから、そのありようを浮かび上がらせる手法を用い、この問題について以下に検討してみたい。そこでいったん日本の作例から離れて、広く同時代（八世紀）の東アジアにおける明王造像に目を向けてみることにする。

中国における八世紀の明王造像の具体的遺例は非常に限られており、それは中唐期（八世紀後半）の造像とされる西安・大安国寺址出土の白玉石刻[26]くらいしか論者は把握できていないが、この彫刻群に含まれるいくつかの明王像は、空海入唐時に受容されることになる明王の姿かたちに近い様相を呈しているようである[27]。むしろ論者が求めるところは、それらに展開してゆくことになる、さらに前段階の明王の姿かたち（図像表現）にある。これまで、そのことを明らかになし得る遺例については全く知られていなかったため、この方面の研究はさほどの進展がなかったように思う。しかしながら韓半島における統一新羅時代（八世紀半ばにさしかかる頃）の明王像の遺例が明らかになったことにより[28]、研究の状況は変わりつつある。もとより直接、韓半島の事例が日本に及んだとは思わないが、これを同時代の東アジアにおける明王造像と捉えるとともに、それらの図像の情報源はやはり中国（唐）にあり、そこから韓半島に及んだ

挿図 8 -(1)　石柱二基（慶州邑城東門址）正面
韓国・慶州国立博物館

挿図 8 -(2)　同 向かって左方分

挿図9　浮彫明王像（石柱表面）　韓国・慶州国立博物館

（7）その4 像高 59.4㎝ 「降三世明王」に比定
（5）その3 像高 59.8㎝ 「金剛夜叉明王」に比定
（3）その2 像高 60.0㎝ 「軍荼利明王」に比定
（1）その1 像高 58.5㎝ 「大威徳明王」に比定

（8） 同上 描き起こし
（6） 同上 描き起こし
（4） 同上 描き起こし
（2） 同上 描き起こし
（津田作成、以下同）

挿図10　浮彫明王像（石柱表面）　韓国・東國大學校博物館



（3）その2 像高 59.0㎝　（1）その1 像高 55.7㎝
「烏枢瑟摩明王」に比定　「無能勝明王」に比定

（4） 同上 描き起こし　（2） 同上 描き起こし

と捉えることの方が穏当なように考えるのである。

すなわち論者が着目するのは、慶州国立博物館の入口ゲート正面の園庭に常設展示されている二基の石柱の表面にあらわされた浮彫の明王像四体にある（**挿図8**）。そして、これと同じ発掘現場（慶州邑城東門址）から出土し、慶州市内の東國大學校博物館のロビーに常設展示されている石柱一基の表面には二体の明王像が浮彫りにされている[29]。恐らく未発見の残りの一基の石柱ともども、これらを四方から寄せ集めて石塔の第一層を形成し、その四面の中央にそれぞれ門扉をあらわし、これを両側から守護するように明王像が各面二体ずつ配置がなされて、今は失われた二明王を含めて全体で八大明王を形成していたものと判断する。

各明王の尊名比定に至る詳細については旧稿に譲るが、失われた二明王（一面四臂立像の不動、馬頭を推定）を含めると、それらは五大明王（不動、降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉）を包摂しつつ、これに烏枢沙摩、無能勝、馬頭の各明王が加わっての八大明王であったと想定している（**挿図9、10**）。

一般に「八大明王」というとき、不動、降三世、大威徳、馬頭、無能勝、大笑、歩擲の各明王のことを指し、それらは晩唐期（九世紀）に達磨栖那の訳出とされる『大妙金剛大甘露軍拏利焔鬘熾盛仏頂経（以下、大妙金剛仏頂経）』において説かれるものである[30]。その訳経の時期を遥かに遡って、統一新羅時代（八世紀半ばにさしかかる頃）の韓半島に八大明王が出現していた事実は刮目すべきであ

る。それらは韓半島で独自に成立・出現をみたと考えるよりは、むしろ唐代密教の図像情報が中国よりかの地にほぼリアルタイムでもたらされ、受容をみた所産であったと考えるのが自然であろう。ここで思い合わされるのは、上述の『大妙金剛仏頂経』の訳出を遡って、八世紀前半の中国（唐代）において確かに「八大明王」の概念が存在したことにある。それは金剛智（六七一～七四一）の訳出になる『金剛峯楼閣瑜伽瑜祇経』巻下に説かれる曼荼羅に「八大金剛明王」をもって布置すべきことへの言及があり[31]、また、善無畏（六三七～七三五）の訳出になる『慈氏菩薩略修愈誐念誦法』に説かれる曼荼羅にも「八大明王」の布置についての言及があることに窺える[32]。いずれも尊名を明らかにし難いものの、それらに照応する具体的な様相を、この統一新羅時代（八世紀半ばにさしかかる頃）の八大明王像に求め得るものと考えるのである。とすれば、その存在は中国・唐代密教造像史上のこれまで空白期の情報を埋めて余りある点に大きな意義を認めなければならない[33]。

ここでは現存する六体の明王像の姿かたちを概観しつつ、共通する特徴に及んでおくと以下の通りである[34]。すなわち、それらはいずれも四臂であり、その面相は上歯牙で下唇を噛みながら大きく目を見開き、火焔をともなう頭光をともなっている。加えて、脚部に纏った裙は両膝頭までを露出させており、このほか蛇を腕釧とするものも確認できる（**挿図9-(3)**）。これらの事象はいずれも小稿の第一節で確認した明王の持つ視覚的特徴に適うものであり、この一群の石刻浮彫をいずれも明王像と判断する所以である。なお、この一群の明王像を眺めるとき、それらの姿かたちについては図像表現が統一されていたものとも思われるが、むしろその点に当時受け入れられていた標準的な明王の姿かたちの特徴（上述）が立ち上がるであろう。

その一方で、平安時代（九世紀）密教の明王像の特徴とはいささか異なる点があることも見過ごせない。それはいずれの明王像も、① 髻は宝髻（単髻）にあらわすとともに、地髪部の髪は頭頂に向けての撫で付け髪とし、髪を逆立てた「炎髪」にあらわさない傾向にあり[35]、② 一面二目で眉根を寄せて両眼を見開き、上歯牙で下唇を噛んで瞋怒の相をあらわし、③ 上半身に条帛を着けないことにある。これらのうち、③に関しては、空海が中国において師事した恵果（七四六～八〇五）によって現図胎蔵曼荼羅へと再編がなされる以前の『胎蔵図像』にあらわれた不動明王が、やはり上半身に条

挿図11　不動明王（『胎蔵図像』上巻 部分）
奈良国立博物館

帛を着けていないこと（**挿図11**）が想起される。とすれば、九世紀の明王像との比較の中で浮かび上がる、この三点が八世紀に遡る明王の姿かたちの古様を伝える特徴として抽出されることになるであろう。

加えて、統一新羅時代の明王像では、条帛を懸けない代わりに、両体側には細長い帛布とおぼしきものが垂下しており、目視ではいまひとつ明確ではないものの天衣を両肩に懸けていたようであることも留意したい。

この天衣の懸用についても、先に確認したように日本における平安時代以降の五大明王像には認め難いものである。ちなみに、空海入唐直前の明王の姿かたちを伝えるとみられる中国・西安 大安国寺址出土の白玉石刻群（既述）に含まれる降三世明王像（**挿図12**）、忿怒金剛像、あるいは、馬頭明王像などでも同様に条帛を着用せずに天衣の懸用が認められる。このことに関して、わが国の八世紀初頭もしくはそれ以前に遡る菩薩像が、しばしば条帛を着けることなく天衣を両肩に懸けることに思い至るとき、それらは同時代の中国における菩薩像の着装を反映したもののようであり、とすれば、小稿の第一節で指摘したように、明王像の造形には菩薩像の象形をその基本において踏襲しつつ、そこからの派生・展開であったとみなしたこととも矛盾しない。そして、これらの統一新羅時代の明王像に認めた図像表現のうちに、空海が中国よりもたらした明王の図像よりも、さらに遡った時代の中国のみならず東アジア世界において共有されていた明王の姿かたちの情報の一端が伝えられていたと考えるのである[36]。

挿図12　降三世明王像（大安国寺址出土）中国・碑林博物館

ちなみに、旧稿では、この統一新羅時代の明王像の図像表現のうち、大威徳明王に比定した明王像（**挿図9-(1)**）が胸前で根本印（檀荼印）を結ばず、「檀荼」の語源になった宝棒（檀荼）、を龍索とともに執る点、あるいは、降三世明王に比定し得た明王像（**挿図9-(7)**）が一面四臂にあらわされる点に、八世紀前半から半ばにかけての訳経者としての活動が知られる善無畏の系統の図像が受容されていた可能性に言及している[37]。

四、大安寺嘶堂 伝馬頭観音立像

さてここに至って、改めて奈良時代の明王造像の可能性について探ってみることにしたい。論者が注目するのは、官立寺院（国家経営の寺院）であった大安寺に残る奈良時代の木彫群のうちにある。

これらの木彫群は、天平十九年（七四七）勘録の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』[38]に記載がないため、この年以降の造立であったと考えるのが適切であろう。

これらの木彫群のうちで着目してみたいのは、現在、「嘶堂」の本尊として安置をみる伝馬頭観音立像（現状像高一七三・五㎝。以下、嘶堂本尊像）にある（**挿図13**）。この嘶堂本尊像は、尊名が確定しておらず、『大和古寺大観』での解説では旧国宝指定時の名称にしたがい「千手観音立像」が採用されていた[39]。また、その尊名について「青面金剛」と考えられたこともあったようであるが、田邉三郎助氏がその解説のなかにおいて奈良時代の「馬頭観音」信仰の文脈の中で理解しようとする所見を示して以来、その見解が支持・継承され、馬頭観音であることを前提にして幾つかの論考が公表されるに至っている[40]。ただし、田邉氏がその解説中で述べるように馬頭観音関係の経典儀軌の所説[41]と必ずしもすべてが一致する訳ではない。

挿図13　伝馬頭観音像　奈良・大安寺

ここでいったん「馬頭観音」という先入観・軛（くびき）から離れて、その姿を虚心に眺めてみるとき、嘶堂本尊像は、頭部、胴体、足元の岩座までを含んで体幹部を針葉樹の一材から彫出している[42]。一面であらわされた頭部（**挿図14**）の髻は後補であり、鼻についても後世の手が加わるものとみられるが、額上髪の毛筋は当初の造形を残している。ただしその髪は撫で付け髪となるようであり、これが立ち上がって炎髪となり得たとは断定し難い。面相は眉根を寄せて眉を吊り上げるとともに両眼を大きく見開き、上歯をもって下唇を噛みしめている。それらは基本的にもとのかたちを留めており瞋怒の相と認めてよい。

一方、体部に目を移すとき、現状の六臂は両肩・腋の付け根よりすべてが後補となる。ただし、その痕跡から六臂と即断はできないものの脇手がともなっていたことは確かであろう。現状、背後に懸かる幅広の天衣も後補であり（**挿図15**）、それが当初において同様

挿図14　伝馬頭観音像 頭部

のかたちであったかどうかは定かでない。

なお、上述の田邉氏の解説では、左大腿に懸かる着衣の文様彩色の痕跡（**挿図16**）について、これが獣皮をあらわしたものとの認識がなされている。そして、蛇をモチーフにして刻出された胸飾と足釧（**挿図17**）は当初の造形をよく留めている。嘶堂本尊像に見るこれらの特徴がいずれも明王像の特徴をよく示していることはこれまでの議論を踏まえれば明白である。かつ、これまでさほど重視されてこなかったことではあるが、① 頭髪を炎髪としないことや、② 一面二目で眉根を寄せて両眼を見開き、上歯で下唇を噛んで瞋怒の相をあらわすこと、③ 上半身に条帛を着けないことは、まさしく韓半島における統一新羅時代の明王の姿かたちにおいて確認した特徴に通じていることも注意したい。

五、奈良時代の明王像への視座

先に述べた通り、大安寺嘶堂本尊像が馬頭観音である可能性については、田邉三郎助氏の指摘以来、支持されてきた。しかし、関係

挿図16　左大腿に懸かる着衣（伝馬観音像 部分）

挿図15　伝馬頭観音像 背面

挿図17-(1)　胸飾（伝馬頭観音像 部分）

挿図17-(2)　足釧（伝馬頭観音像 部分）

の経典儀軌の所説とその姿が合致しているかどうかはいまひとつ明確でなく、これを馬頭観音像と特定することの決め手を欠くのも事実であろう。むしろ、論者は、八世紀半ばを遡って八大明王の図像が既に成立し、韓半島にも及んでいたことを視野に入れるとき、嘶堂本尊像をわざわざ「馬頭明王」とも密教経典に説かれる「馬頭観音」に限定するよりも、もう少し可能性を広げて、それが確かに明王の造形に他ならないことの方が重要であり、なによりも明王像が平城京の官立寺院（国家経営の寺院）において出現をみたという事実の方に大きな意味があるように考えるのである。

ここであわせて及んでおきたいのは、宝亀十一年（七八〇）勘録の『西大寺資財流記帳』の「仏菩薩像 第三」の項の「薬師金堂」あるいは「四王堂」において、明王とみなし得る尊像が「馬頭観世音菩薩像」はもとより、「孔雀明王菩薩像」「摩訶摩由璃菩薩像」「火頭菩薩像」といった「菩薩」をその名に含む表記をもっていずれも記載をみたことにある[43]（**挿図18**）。いうまでもなく西大寺もまた官立寺院であった。そして、この『西大寺資財流記帳』において明王に菩薩の呼称をもっていずれもが表記なされている事実を思えば、既に小稿において指摘したように、それは明王が菩薩と同格に扱われるべきとしたことと軌を一にすることのようである。かつ、その表記のありようは、明王という「伝統仏教」には存在しなかった新たな尊格の受容にあたって、それを菩薩からの変化（へんげ）の一形態として捉え、菩薩と同格としていたゆえに、その認識に立っての表記であったように考えるのである。このことは大安寺嘶堂本尊像の着装が菩薩像のそれを基本としていたことにも符合するであろう。

そうとみるとき、この嘶堂本尊像を含むいわゆる「大安寺木彫群」のなかの伝楊柳観音像（像高一六八・五㎝）（**挿図19**）が、頭頂に単髻を結い上げ（ただし現状後補）、地髪の髪を撫で付けとし、眉根を寄せて眉尻を引き上げて両眼を大きく見開き、瞋怒の相を

挿図18　西大寺資財流記帳（部分）奈良・西大寺

挿図19　伝楊柳観音像 頭部 奈良・大安寺

尊もまた、明王でもあり菩薩でもあるという性格をあわせもっていたことは、現図胎蔵曼荼羅における馬頭観音の座位が観音部（蓮華部院）に属しながら、明王部（持明院）と隣接する位置にあったことに端的に示されている（**挿図20**）。すなわち、現図胎蔵曼荼羅への再編に際して、当時の中国における菩薩と明王の両方の性格を合わせもつ「馬頭」尊そのものについての位置づけと認識がそのまま反映していたとみるべきであろう。ただし、だからと言って嘶堂本尊像を馬頭観音の造形と判断することには慎重にならざるを得ない。というのも、頭部を一面二目とし、上歯をもって下唇を噛み、瞋怒の相にあらわし、腰には獣皮を纏い、装身具に蛇のモチーフを取り込み、両足下にそれぞれ蓮華を踏まえ立つ明王像ということであれば、現状からは当初の臂数が不明であるので、八世紀半ば頃までに成立していた明王像が統一新羅時代の八大明王像のように四臂にすべて限定されるものであったかどうかは定かでなく、いまそのことをひとまず問題にしないなら、その当初部は『陀羅尼集経』巻八「軍荼利金剛受法壇」に説かれるところの軍荼利明王の姿かたちの方がよく合致しているといえるからである[45]。軍荼利明王像の東アジアにおける具体的造像の一端が八世紀の統一新羅時代の八大明王像の作例中に確認できるうえに（**前掲挿図9-(3)**）、『陀羅尼集経』の受容そのものが奈良時代に遡り[46]、さらに平安時代以降にあっても、この経典が軍荼利明王像の姿かたちの儀軌的根拠になり得たことを思えば[47]、嘶堂本尊像が軍荼利明王をあらわしていた可能性をただちに除外・否定することは出来ないであろう。

挿図20　現図胎蔵曼荼羅（西院本）部分　京都・東寺

もってあらわし得たことも、統一新羅時代の明王像の存在を視野に入れるとき、二臂像ながら、その面相の基本において通じており、加えて単に上歯で下唇を噛む閉口にとどまらず、開口の表現も当時既にあり得たと解するならば尊名の特定は困難であるが、菩薩と同一ステージ上に格付けされた明王をあらわしていた可能性は十分あるはずである[44]。

ここに至って嘶堂本尊像に立ち戻るとき、必ずしも「馬頭」尊であったとは即断できないが、その尊格の立ち位置にあって「馬頭」

もとよりこの嘶堂本尊像が、奈良時代の孤立した明王の特殊造像事例でないことは、『西大寺資財流記帳』にみる上述の明王像群、それらは今となっては既に失われてしまい面影を全く窺うことができないものの、それらがかつて存在していた事実からも明らかである。

ここで試みに大安寺嘶堂本尊像の造像の時期と事情に踏み込んで私見を示してみるならば、思い合わされるのは宝亀年間において西大寺徳清とともに入唐し、宝亀九年（七七八）に帰国を果たした戒命の存在にある[48]。戒命の入唐は、南都仏教界の意向を承けての使命が優先事項となったことはいうまでもないが[49]、その帰国後、大安寺に止住していたことが確認できることから[50]、この入唐を機に、かの地で八世紀中ごろには既に成立していたとみられる明王の図像情報を戒命が持ち帰っての造像であったようにも考えるのである。そのことは嘶堂本尊像の作風とも矛盾しない。とすれば戒命の帰国後、宝亀九年以降のさほど時を隔てない、ひとまず宝亀末年（七八一）頃までの造像を想定してもよいであろう。

そうと考えるとき、宝亀十一年（七八〇）には西大寺において『西大寺資財流記帳』が勘録をみた訳であるが、そこには明王諸像の記載が認められた事実を思えば（既述）、その勘録が戒命とともに入唐を果たした徳清の帰国後のことであったことも興味深いものがある。かつ、徳清が『大日経』の解読には欠かせない『大毘盧遮那経義記』の持ち帰りを使命としていたことに、徳清の密教への関心が示唆されており、『西大寺資財流記帳』に記載のある明王諸像の造立に徳清の関与を想定してみることも一案であろう[51]。平城京の官立寺院において奇しくもほぼ同じ時期に密教造像を特徴づける明王像の出現が果たされていたことになる。そのことは奈良時代の密教受容が新たなフェーズ（段階）に進んでいたことを象徴する事象となり得るであろう

ここに至って想起されるのは空海自らが撰述した『三教指帰』序の文章である。その言辞のうちに、空海の正式な出家授戒にいたるまでの動向を読み取るならば[52]、平城京において官人の道を自ら軌道修正し、優婆塞・私度僧に身を投じつつ密教修学に自らの方向性を見い出し、入唐を志すことになる若き日の空海の目には、この官立寺院に出現をみた新規の明王像が刺激となった可能性は一概に否定できない。まさしく大安寺嘶堂本尊像は、文字史料でしか伝わらなかった西大寺における明王諸像ともども、奈良時代の平城京の官立寺院における「新密教」の胎動を如実に反映した造像をいまに具体的に示し得る点にその意義が見出されるように考えるのである。

註

（1）論者の認識では、「古密教」という語彙が日本彫刻史で認知されはじめるのは、一九八〇年代における井上正氏による一連の「古密教系彫刻」研究あたりからであり（その成果の蓄積はのちに、『古佛―彫像のイコノロジー―』法蔵館、一九八六年、『続古佛―古密教彫像巡歴』同、二〇一二年に結実する）、この語彙が広く浸透するのは、二〇〇五年に奈良国立博物館において開催された『特別展 古密教 日本密教の胎動』（会期 七月二六日～九月四日）に拠るところが大きい

ように考える。

（2）　大安寺嘶堂本尊である伝馬頭観音立像のこれまでの研究蓄積は以下の通りである。

小林剛「大安寺の木彫群について」『東洋美術』一五輯、一九三二年（一～二六頁）。

「解説」『南都十大寺大鏡』二〇輯（大安寺大鏡）、大塚巧藝社、一九三四年（三頁）。

梅原隆嗣「大安寺の馬頭観音」『観音菩薩の研究 観音の基本的研究と奈良朝仏教に現れたる観音信仰』専長寺文書伝導部、一九五〇年（一二四～一二五頁）。

佐和隆研「唐招提寺と大安寺の密教像」『日本密教 その展開と美術（NHKブックス）』日本放送協会、一九六六年（七六～八〇頁）。

田中義恭 図版54解説『日本美術全集』第四巻、学習研究社、一九七七年。

田辺三郎助解説「（大安寺）千手観音菩薩立像」『大和古寺大観』第三巻、岩波書店、一九七七年（七一～七二頁）。

西川新次『大和の古寺』新薬師寺・白毫寺・円成寺・大安寺、岩波書店、一九八二年。

田中嗣人「大安寺の造営と諸尊の造立」『佛教藝術』一八七号、毎日新聞社、一九八九年。

井上一稔『如意輪観音と馬頭観音（日本の美術三一二）』至文堂、一九九二年（五九頁）。

片山寛明「奈良大安寺嘶堂の秘仏本尊と蛇の装飾を着けた馬頭観音」『日本美術の空間と形式 河合正朝還暦記念論集』二玄社、二〇〇三年（二九～四三頁）。

真田尊光「大安寺伝馬頭観音立像の周辺」『奈良古美術研究』一七号、早稲田大学奈良美術研究所、二〇一六年（三一～四〇頁）。

真田尊光「鑑真一行と大安寺伝馬頭観音」『鑑真と唐招提寺の研究』吉川弘文館、二〇二一年。

内藤航「大安寺の木彫群に関する覚書―十一面観音像、伝楊柳観音像、伝馬頭観音像を中心に―」『特別展 大安寺のすべて―天平のみほとけと祈り―』図録（会期は四月二三日～七月十九日）、奈良国立博物館、二〇二二年（一四五頁～一四八頁）。

（3）　なお、「密教」に対して「顕教」と呼ぶこともあるが、これは「密教」を基準にして、それ以前の「伝統仏教」をそのように呼んだものである。

（4）　石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術、一九七五年（一四頁）。

（5）　現存しないが記録のうえでは承平元年（九三一）勘録の『神護寺実録帳』に記載をみる、淳和天皇（七八六～八四〇）の御願として天長年中（八二四～三四）の造像という等身彩色の五大明王像（「五大堂」安置）が、東寺講堂五大明王像に遡る本格的造像の嚆矢であったとみられる。

（6）　その認識の一端は、岩田茂樹「明王の彫刻―不動明王像の展開を中心に―」（『特別展 明王―怒りと慈しみの仏―』図録、奈良国立博物館、二〇〇〇年、会期は四月二九日～六月四日）において、宝亀十一年（七八〇）勘録の『西大寺資財流記帳』四王堂の条にみえる「火頭菩薩」の存在に及んで、「この菩薩は烏枢沙摩明王と同体かと考えられるが、やはり菩薩と称されるから、純密伝来以降の明王像にみる多面多臂で忿怒形の像容ではなかったとする考え方が一般的である。とすれば、現在われわれが明王と呼んでいる、忿怒形で童子身、ときに多面多臂ないし多眼の怪異な尊像の出現は、わが国においては、空海によってはじめて系統的に密教が伝えられて以降のことと考えてよいようである。」（一四五頁下段～一四六頁上段）と説明されることに認識の一端が示されているであろう。

（7）　堀池春峰「奈良時代仏教の密教的性格」『西田先生頌寿記念 日本古代史論叢』吉川弘文館、一九六〇年（のち同『南都仏教史の研究』下

巻、法蔵館、一九八二年、四〇三頁～四一九頁に収録）。

（8）石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究（東洋文庫論叢 第十一）』東洋文庫、一九六六年再版（初版は一九三〇年）に拠る（一四六～一五九頁）。

（9）註1で言及したように日本彫刻史が用いてきた「古密教」の語彙は、「純密」以前の密教彫刻を一括りにしてのものであり、これを遡って石田茂作氏が提示した「古密教」の語彙とは、その規定の基準となるものと範疇の設定に大きな違いがある。このことは留意すべきように考える。

（10）『続日本紀』天平十八年（七四六）六月己亥条（玄昉卒去の記事）のなかに「靈龜二年入唐學問、唐天子尊昉、准三品令著紫袈裟、天平七年隨大使多治比眞人廣成還歸、賚（もたら）シテ經論五千餘巻及ヒ諸佛像ヲ來ル」と記す（文言は『増補新訂 国史大系』巻二、吉川弘文館、一九七四年に拠る）。大平聡氏の次に掲げる研究に拠ると、霊亀二年（七一六）八月癸亥に入唐使の人事が行われ（『続日本紀』同年月日条）、出立は養老元年（七一七）のことであったことが指摘されており、玄昉の入唐留学もこの折の遣唐使に官許を得て同船したとみなされている。
大平聡「留学生・僧による典籍・仏書の日本将来―吉備真備・玄昉・審祥―」『専修大学社会地勢開発研究センター東アジア世界史研究センター 年報』二号 古代東アジア世界と日本・新羅の留学生、二〇〇九年。

（11）註10の大平聡前掲論文。

（12）註10の大平聡前掲論文。

（13）註10の大平聡前掲論文。

（14）『大正新脩大蔵経』55巻―六八七ｃ。

（15）別掲表1の『大日経』の一覧冒頭の天平八年九月二十九日の事業において二箇所に記載のあるその員数が「三巻」となっていることはいささか不審であるが、前者（『大日本古文書』七巻七五頁）については、出納検収にあたって「三」の員数を「七」と見せ消ちで改めているようである。

（16）奥書識語から吉備由利が称徳天皇の奉為に発願し、書写がなされた一切経の遺例であったことが判明する。ちなみに宝亀十一年（七八〇）勘録の『西大寺資財流記帳』の記載からこの時、書写がなった一切経は四王堂内の四基の厨子に納置されたことが知られる。
鈴木康子「西大寺奉納神変加持経の願主吉備由利について」『大和文化研究』五巻三号（通巻二三号）、同研究会、一九六〇年。

（17）なお、「正倉院文書」には『金剛頂瑜伽中略出念誦経』とは別に『金剛頂経』の表記をもって記載される事例が八件確認できる（**表2**）。これを唐において不空が天宝十二年（七五三）より訳経に着手した『金剛頂経（正しくは金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経）』三巻のことを指しているとみることには慎重とならざるを得ない。というのも、天平八年（七三六）九月二九日分と天

表2「正倉院文書」にあらわれた『金剛頂経』の書写（一覧）

対象経典	事業日（出納もしくは写後検収）	巻数	枚数	巻	頁
【参考】『金剛頂経』	天平8年（736） 9月29日	1巻	一	7	57
	天平勝宝3年（751）12月15日類収	1巻	一	12	191
	宝亀2年（771）1月24日	巻2, 3, 4	18, 口, 24	18	145
	宝亀2年（771）3月20日	一	13紙	18	248
	宝亀3年（772）3月11日	一	1紙	19	352
	宝亀5年（774）8月 2日	一	13紙	22	526
	宝亀6年（775）2月 2日	1巻	13紙	23	387
	宝亀6年（775）5月18日	一	13紙	23	503

※一覧の作成には『大日本古文書 編年文書』を使用した。向かって右端の「巻」、「頁」は同書の巻次と収載頁を示す。

平勝宝三年（七五一）十二月十五日類収分にあらわれたそれらは、不空の訳経着手以前に遡ることになるので同一視することができない。また、続く宝亀二年（七七一）一月二十四日分にあらわれたそれには、巻二（十八紙）、巻三（□□（廿六カ）紙）、巻四（廿四紙）という明細が併記されており、その巻次構成と各巻の用紙枚数を手がかりにすれば、『金剛頂瑜伽中略出念誦経』を指していたと見た方が穏当であろう。さらに残りの『金剛頂経』とあるものについても、そこにあわせて表記された用紙枚数十三枚をもって一巻をなしていたことを手がかりにすると、「正倉院文書」のなかに「金剛頂経曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品一巻 十三枚」を明記するものが確認できるところから（例えば『大日本古文書 編年文書』二〇巻一三六頁、二一巻四〇頁）、上述の天平八年九月二九日分と天平勝宝三年十二月十五日類収分にあらわれたそれらを含めて、これに同定し得るものと考える。

(18) 西大寺玄叡（生年不詳～八四〇）撰『大乗三論大義鈔』第三に見える「然宝亀年中、使徳清法師等、遣唐検之」にもとづく（『大日本仏教全書』第七五巻・古宗部三、仏書刊行会、一九一三年、六六頁下段）。徳清の入唐年次については、東野治之氏の考証によって宝亀三年（七七二）の可能性が提示され、王勇氏をはじめとする後続研究もこれが支持されてきた。しかし松本信道氏によって、依拠史料の再検討により、これを退け、宝亀八年（七七七）の入唐が改めて提示されるに至っている。ここで思い合わされるのは、松本信道氏が注目されたように、宝亀七年二月五日に書き上げられた『東大寺六宗未決議』の奥書に引用をみる同六年十二月十三日付 僧綱所発給の牒に「勘二出シ各宗ノ一 切経論草（章カ）疏傳集等ノ所レ疑トスル文義等一ヲ、寄セ二返シ學僧等一ニ、以テ決セムト所レ疑トスル者」とあることに続いて、「今依二リテ牒旨一ニ、注シ二顕ラカニシ別レニ宗未決ノ文幷ニ未度来ノ書等ヲ申上スルコト」という一文が記される点にある（『大日本仏教全書』第三巻・諸宗要議集、仏書刊行会、一九一六年、六頁下段）。この僧綱所よりの要請に応えて南都六宗からの「未決ノ文義」（＝唐決〈入唐して學僧を探し出し疑問を質すこと〉を必要とするもの）と「未度来書」の有無について僧綱所に提出をみた「申上」を携えて入唐が果たされたとするのが自然であり、そのことを念頭に置くならば宝亀八年の入唐の方に整合性があることは言うまでもない。

東野治之「日唐間における渤海の中継貿易」『日本歴史』四三八号、吉川弘文館、一九八四年（のち、同『遣唐使と正倉院』岩波書店、一九九二年に再録）。

王勇「東アジアにおける「三経義疏」の流伝―隋唐時代のブックロードをめぐって―」『奈良・平安朝の日中文化交流―ブックロードの視点から』農山漁村文化協会、二〇〇一年。

松本信道「徳清の入唐について」『駒澤大學文學部研究紀要』六八号、二〇一〇年。

松本信道「『東大寺六宗未決義』の思想史的意義」『駒澤史学』六一号、駒澤大學史學研究室、二〇〇三年。

(19) 註18の松本信道前掲論文「徳清の入唐について」。なお、この「未度来書」の呼称は、註18で言及した宝亀七年二月五日に書き上げられた『東大寺六宗未決義』奥書識語にみえる語彙にもとづく。

(20) 清水明澄「『大日経』の注釈書の書誌学的研究」『密教文化』二一九号、密教研究会、二〇〇七年。

(21) 安然（八四一頃～九一五頃）撰『諸阿闍梨真言部類惣録（いわゆる「八家秘録」）』「胎蔵界部第二 本経義釈一」の項に拠れば以下のように記されている（『大正新脩大蔵経』55―一一四c）。

大毘盧遮那經義記十卷（無畏釈 一行記 山階玄昉僧正）
大毘盧遮那經義記七卷（上下十四卷西大德清大德）

(22) 元慶八年（八八四）に円珍が撰述した『大毘盧遮那成道経義釈目録縁起』には、このことに関して次のように記していることが参考となる（『智證大師全集』中巻、園城寺事務所、一九一八年、七〇一頁上

段）。

又聞、平城山階寺或名興福有一本、此玄昉師入唐將來、昔我比叡祖大師借看昉本、不堪可寫、當時還却、寫西大本、自充披覽（以下略）、

（23）註18の松本信道前掲論文「徳清の入唐について」。このことに関して、円珍録『大毘盧遮那成道経義釈目録』の「第一 延暦寺藏 一部十四巻」の項の末文に次のように記されていることも参考となるであろう（註22の『智證大師全集』中巻、七〇四頁上段）。

已上一十四巻、其元者西大寺徳清大徳入唐時將歸之本也、比叡大師尋覓彼處抄寫、創流通之、

（24）武内孝善「奈良時代における大日経の受容」『インド学諸思想とその周延（佛教文化学会十周年 北條賢三博士古稀記念論文集）』同刊行会編、山喜房仏書林、二〇〇四年（三九一～四二四頁）。

（25）註8の石田茂作前掲書（一五〇頁）。

（26）水野敬三郎「〈表紙・口絵解説〉西安大安国寺遺址出土の宝生如来像について」『佛教藝術』一五〇号、毎日新聞社、一九八三年。

（27）ちなみに、伊東史朗氏は後掲論考において、この大安国寺址出土の白玉石刻群の造像を不空（七〇五～七七四）の活動時代の造像と考えられている。とすれば、皇帝勅命により長安への帰還を果たし、大興禅善寺を活動の拠点とした天宝十四年（七五五）以降、その没年（七七四）の間ということになるであろう。ただし、私見では本文中で述べたようにもう少し時代の下った八世紀最末あたりを考えている。

伊東史朗「真言密教彫像論」『神護寺と室生寺（小学館ギャラリー新編名宝日本の美術8）』小学館、一九九二年（一〇〇～一〇一頁）。

（28）津田徹英「統一新羅時代の八大明王をめぐって」『韓国の浮彫形態の仏教集合尊像（四仏・五大明王・四天王・八部衆）に関する総合調査 平成十六年度～平成十八年度科学研究費補助金成果報告書（研究代表者 朴亨國）』二〇〇八年。

津田徹英「統一新羅時代における八金剛ならびに八大明王の造像」『アジア仏教美術論集 東アジアⅥ 朝鮮半島』朴亨國・井手誠之輔編、中央公論美術出版、二〇一八年（二〇七～二三二頁）。

（29）現場で論者が計測した三基の法量の概略は以下の通り（単位はcm）。東國大學博物館所蔵のそれの方が石柱の現状において数センチ丈が短いが、石柱表面に浮彫であらわされた門扉の片扉の高（五〇・〇cm）・幅（九・五cm前後）が共通するとともに、明王の各像高（挿図キャプションに表記）が近い値を示し、かつ、その作風を勘案して、石柱三基は一具を成すものと判断した。なお、東國大學校博物館の石柱一基の一面にあらわされた明王像（挿図10―(1)）のみ、僅かながら像高を低くすることについて、その真手を上方に向けて伸ばすことも考慮されなくてはならないであろう。ちなみに、小稿での各明王像の像高は頭頂―踵で計測した数値をもって表示した。法量の詳細については註28の津田徹英前掲論文「統一新羅時代の八大明王をめぐって」を参照されたい。

石柱 慶州国立博物館（右） 総高 八六・〇 幅 四四・五 奥 四五・〇
同 （左） 総高 八六・〇 幅 四四・〇 奥 四五・〇
東國大學校博物館 総高 八二・五 幅 四四・五 奥 四五・五

（30）佐和隆研編『仏像図典』法藏館、一九六二年（一一六頁）。なお、『大妙金剛経』は入唐八家のうち、承和九年（八四二）に入唐し、同十四年（八四七）に帰国を果たした恵運（七九八～八六九）の将来録「恵運律師書目録」にその名が見えることから（鎌倉時代の高山寺本を底本にした『大正新脩大藏経』55―一〇九bに拠る）、それ以前の成立であることは確かであろう。

（31）『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』巻下の「金剛吉祥大成就品第九」に説かれる当該文言を示しておくと以下の通りである（『大正新脩大藏経』18―二六三a）。

復説畫像曼拏攞法、取淨素氎等自身量而圖畫之、凡一切瑜伽中像、皆身自坐等量畫之（中略）次第三花院、右旋各畫八大金剛明

王（以下略）、

なお、これに続く「是名畫像法、曼拏羅亦如此」の直後の割注には「法持（異本では「将」）阿闍梨云、八大菩薩如理趣經、八大金剛如攝一切佛頂王經説」とあり、八大明王の像容について依拠すべきテキストが示されている。そこに記された「攝一切佛頂王經」が具体的に何を指しているのか論者は明らかにする手立てを持ち合わせていない。ただし、その直前に「八大菩薩如理趣経」とあることに関して、ここでいうところの『理趣経』とは玄奘訳『大般若波羅蜜多経』第五七八巻の「第十般若理趣分」（『理趣分経』）を指すとみるより、直接には不空が広徳元年（七六三）から大暦六年（七七一）にかけて訳した『理趣経（正しくは大楽金剛不空真実三麽耶経 般若波羅蜜多理趣品）』を指すと考えるのが穏当であり、とすれば、この『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』を訳した金剛智（六七一～七四一）の没後に、書き込まれた割注が伝承過程でそのまま残ったものと判断すべきであろう。

(32) 『慈氏菩薩略修愈誐念誦法』巻下の「慈氏菩薩略修愈誐法觀一生補處諸佛集會灌頂漫拏攞品第七」に説かれる当該文言を示しておくと以下の通りである（『大正新脩大蔵経』20―五九八ａ）。

第四院方壇、十方諸佛兼菩薩及二侍者、八大明王并諸侍者、悉地仙衆并侍者、八大聲聞及四大縁覺等衆、皆依本法畫之（以下略）、

(33) 註28の津田徹英前掲二論文。

(34) 現状、表面の風化により細部が写真版では確認しにくいので、現地で論者が作成した描き起こし図をあわせ提示して、それらの明王像の特徴がどのようなものであったかを押えておくことにしたい。

(35) 大威徳明王に比定した明王像（挿図9-(1)）では両耳上の髪束の毛先が小さく三日月状となり上に跳ね上げてあらわされるところから、髻とは別に小さく炎髪をあらわすようでもある。また、降三世明王に比定した明王像（挿図9-(7)）は、筒型の宝冠を戴くようである。

(36) もとより、八世紀の明王の着装表現の特徴をあまり硬直的に捉えることは難しいのも事実である。というのも、『胎蔵図像』においては不動明王（前掲挿図11）では条帛を着けていないことが確認できる一方で、そこに不動明王とともにあらわれた明王系とみなし得る尊像のなかには条帛を着けるものが散見するからである。加えて、この『胎蔵図像』の不動明王では裙を持ち上げて両膝頭までを露出させる点において、統一新羅時代の明王像や、降って平安密教の明王像を代表する東寺講堂所在の不動明王像を除く四明王像とも共通するものの、同じく『胎蔵図像』のなかにあらわれた他の明王系の尊像には裙裾が足首にまで及んでいるものも多く存在する。また、中国・大安国寺址から出土した明王像群にあっては、不動明王とおぼしき瞋怒像（両臂以下を欠失）では天衣とともに条帛を着用していることが確認でき、加えて裙の着装のありようにおいて、馬頭明王像、忿怒金剛像ともども足首にまで裙裾が及んでいる。さらに現図胎蔵曼荼羅やこれに先行する『胎蔵旧図像』にあらわれた不動明王では、天衣を着けずに条帛を懸け、纏った裙の裾が足首に及んでいる。

(37) 註28の津田徹英前掲論文「統一新羅時代の八大明王をめぐって」。

(38) 『大和古寺大観』第三巻、岩波書店、一九七七年（一二七～一二九頁）。

(39) 註2の田邉三郎助前掲解説。

(40) 註2の諸氏前掲論文参照。

(41) 註2の田邉三郎助前掲解説で上げられた不空訳『菩提場所説一字頂輪王経』の所説（該当箇所）を挙げれば以下の通り（『大正新脩大蔵経』19―一九九ａ）。なお、文中の「賀耶佉哩嚩」は馬頭の梵語（hayagrīva）の漢音表記である。

畫賀耶佉哩嚩大明王、身如火色、作忿怒形、鼻如猿猴、以蛇莊嚴瓔珞臂釧髆釧、頭繫蓮花鬘、作瞻視輪王勢、近彼應畫蓮花孫那利、四臂右第一手持羂索、左第一手持鉞斧、右第二手施願、左第

二手持菓、坐於蓮花、

(42) 註2の田邉三郎助前掲解説。

(43) 『奈良六大寺大観』第十四巻・西大寺、岩波書店、二〇〇一年補訂版（一二九～一三〇頁）。

(44) なお、統一新羅時代の明王像はもとより、平安密教の五大明王像の典型作例である東寺講堂像のうち、不動明王像を除く四明王像において認められるような裙の裾が持ち上がり両膝頭までを露出させるということが、伝楊柳観音像あるいは伝馬頭観音像に認められないことについて私見を述べておくならば以下のように考える。すなわち、奈良時代の明王像の受容の最初期にあって、これを菩薩からの派生・展開のなかで理解しようとしていたという認識に立つとき、やはり、菩薩同様に裙裾が足首にまで及ぶことはあり得るように考える。したがって、その着装のありようを根拠にして、明王像とみなし得ないと判断することはできないであろう。事実、必ずしもそうでなかったことは註36で述べた通りである。

(45) ここで『陀羅尼集経』巻八「軍荼利金剛受法壇」に説かれる軍荼利明王の尊容を嘶堂本尊像の当初部を見据えて提示してみると以下の通り（『大正新脩大蔵経』18―八五六b～c）。ゴシック体で強調したところが嘶堂本尊像との照応箇所を示す。

若欲受持軍荼利法、先畫其像、遍身青色、**兩眼**俱赤、**攬髮成髻**、其頭髮色黒赤交雜、如三昧火焔、**張眼大怒**、**上齒皆露而齩下脣**。**作大瞋面**、**有二赤蛇兩頭相交**、**垂在胸前**、**頭仰向上**、其兩蛇尾各穿像耳。尾頭垂下至於肩上、其二蛇色如黄侯蛇、赤黒間錯、其像有八臂手（中略）八手腕中皆著金釧、以紫色地散花錦天衣、絡髏項背、令其天衣頭分左右各垂向下、將以緑表肉紅、裏帯、用繫其腰、**虎皮與錦**、**鞔其兩胯**、**其兩脚脛各有赤蛇**、**絞其脚脛**、其兩蛇色赤黒間錯、**仍令其像立於七寶雙蓮花上**、**其右脚指還向右邊**。**其左脚指還向左邊**（以下略）、

(46) 『正倉院文書』に残る写経のための出納もしくは写後検収の文書のなかにあらわれた『陀羅尼集経』の初見は、天平八年（七三六）九月二日付「寫後経所解」とみられる（『大日本古文書 編年文書』巻二―五二五頁）。以後、宝亀六年に及んで七十六か所にその名が確認できる。

(47) 津田徹英『平安密教彫刻論』中央公論美術出版、二〇一六年（二六八～二六九頁）。

(48) 註18の松本信道前掲論文「徳清の入唐について」、同「『大仏頂経』の真偽論争と南都六宗の動向」『駒澤史学』三三号、二〇〇三年、ならびに同「『延暦僧録』戒明伝の史料的特質」『同』三七号、一九八七年。なお、戒命入唐中の動向について美術史分野からの研究に次の論考がある。

神野裕太「大安寺戒命請来の宝誌和尚像について」『組織論―制作した人々（仏教美術史論集6）』津田徹英編、竹林舎、二〇一六年（一一～二四頁）。

(49) 註18および註48の松本信道前掲論文。

(50) 戒命の大安寺止住について『日本高僧伝要文抄』（『新訂増補 国史大系』三一巻、二〇〇〇年、吉川弘文館、八八頁）に収載されたことで今日に伝わた思託撰『延暦僧録』逸文中の「知名僧沙門釈戒命伝」（巻五に収録されていたとみられる）には、冒頭に「釈戒命者、讃岐国人也、俗姓ハ凡直氏、居ス大安寺ニ、弱冠ニシテ出家シ、依リテ大安寺慶俊法師ニ為シ師主ト、学フ華厳経ヲ、便チ窮メ奥旨ヲ兼テ採ル異聞ヲ、遠近ノ緇流蒙ル其ノ日月ヲ」とあり、さらに文中の「在テ後ニ宝亀十年、城中ノ諸僧都テ集リ大安寺ニ、連署シテ欲シ奏シテ廃セムト大仏頂経ヲ云フナラク、是レ偽経ナリ、令メ戒命ヲシテ連署セ、収リ取シテ大仏頂ヲ焚焼セムト、戒命不ス敢テ」と記されている。記述のうちに大安寺を拠点に活動していたことが窺うことができる。

(51) この『西大寺資財流記帳』の四王堂の条に記載をみる「火頭菩薩

像二軀」以下の群像表現のうちに読み取ることのできる構想については、稿を改めて考えてみたい。

(52) すなわち、『三教指帰』序の「二九ニシテ、遊二聴ス槐市一ニ、拉キ雪蛍ヲ於猶ホ怠レルニ、怒ニ縄錐之不レル勤メ一（中略）遂ニ乃チ、朝市ノ栄華、念念ニ厭ヒ之ヲ、巌藪ノ煙霞日夕ニ飢フレ之ヲ」（『三教指帰 性霊集』（日本古典文学大系71）』岩波書店、一九七七年、八四～八五頁）とある文章のうちに、空海は延暦十年（七九一）・十八歳で平城京の大学寮に入学し、その後は栄達の道を嫌い、優婆塞もしくは私度僧という身分で修行に努めていたことが窺うことができる。そして、入唐直前の延暦二十二年（八〇三）四月・三十歳前後で出家し、東大寺戒壇院において具足戒を受けたことが知られる（東野治之「空海の入唐資格と末期の遣唐使」『文化財学報』二三・二四号、奈良大学文学部文化財学科編、二〇〇六年）。当然、入唐以前の空海は、平城京においての密教の動向、ことに官立寺院である大安寺や西大寺における当時のありようというものを自ら見聞・体現していたとみるのが自然であるように考えるのである。

【付記】

小稿は、二〇二二年四月一日から一年に及んでの英国滞在中の七月七、八日に、受け入れ機関であったノリッジのセインズベリー日本藝術研究所が主催したオンライン・ワークショップ Absence, Presence, and Materiality: Refiguring Japanese Religious Art and Culture（邦訳 モノとしての不在と顕在―日本の宗教芸術と文化の再構築）（オーガナイザー 詹妍怡（Yen Yi-Chan）氏、聴講者は英語圏を中心にロシア、台湾、日本に及んで両日でのべ八六名）の第二日目に Reinterpreting Esoteric Buddhist Sculpture in Nara period (8th century)（邦訳 奈良時代・八世紀における密教彫刻再考）のタイトルでの英語による口頭発表原稿をもとにして、これを加筆改訂して成ったものである。渡英早々に思いがけず口頭発表の機会をお勧めくださった同研究所長サイモン・ケナー氏、また、そのことを快く了解していただいたオーガナイザーの詹妍怡氏、さらには発表原稿の英文チェックとともにアドバイスを頂戴した同研究所の林美和子氏、松葉涼子氏に心から御礼を申し上げます。

（渡英中のノリッジにて執筆・校了）